

Saturday

We color your everyday with something Saturday!

Progress Table

1. **Night in Confusion** 『確実な口約束』
 2. **That Night** 『きっかけ』
 3. **For Your Information** 『一身上の都合により』
 4. **Policy** 『分別と高慢』
 5. **Thanks, but no thanks.** 『ありがた迷惑』
-

1. Night in Confusion

確実な口約束



Kikyo

+

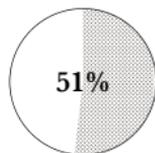


Tsukika

+



Yoko



「たしかに、行ったことがないところに行きたいとは言ったけど」

それだけじゃ寒い、と出がけに強引に肩にかけられたストールの前を合わせながら、私は小さくこきこきと首を鳴らした。

「だからって、変化球過ぎない？」

膝が隠れる丈のタイトスカートにハイヒールを履いた足で踏みしめているのは、しつとりと湿った土だった。足踏みをする、やわらかな地面の中にずぶずぶとヒールが沈む。エナメル素材でよかった、と思いつつ見上げた看板には、【夏季限定！ ナイトサファリ】と力強く書いてある。

「いいじゃん、楽しいよ」

ぴつたりとしたブラックデニムに赤いハイカットのコンバースを履いた月果は、くつたりと体に馴染んだキャメルのライダースの袖をまくり、浅くかぶっていたキャップをきゅつとかぶり直した。

「月果、夜の動物園大好き」

子どもの頃、お父さんの仕事の都合で日本に來ると、度々こちらで過ごしていたと

いう月果は、たしかに土地勘があるらしく、那須に入ってからほとんどナビを使わずに運転をしていた。

「そうね。でも、動物園とはだいぶ趣が違うわよね」

ここ、サファリパークだし、と看板を声に出して読むと、はじめて山菜を食べさせたときのような顔で、しょうがない！ と月果はなぜか偉そうに叫んだ。

「臨機応変について、子どもの頃に習った！」

前に並んでいた小学生の女の子がびつくりして振り返り、人形みたいな月果のルックスに二度驚いて、ぽかんと口を開けている。彼女が慌てて前を向き直るのを待ち、私は正論を口にした。

「ふつうにごはんを食べるのでよかったです」

夕方に上品な量のスコーンを取めただけの体は、とても軽い。うん、それはたしかに空いたと、たしかケーキセットにサンドイッチを追加して食べていた胃下垂のパーツモデルは簡単に賛同した。ちらりと平らなお腹を一瞥し、念のために確認する。

「これ、終わった後にまともなところでごはん食べられるの？」

「大丈夫！ 夜までやつてるおいしいお肉屋さんがある。だから、ライオンがお肉食べてるの見て、肉モードを高めてから行こう」

「悪趣味ね」

それ以外の感想を抱けない発言に、眉をひそめるのも忘れていると、でも、なんかペンションっていいね、と月果はぜんぜん違うことを喋り始めた。

「こうやって夜に外出するのも、なんだかこっそり寮を抜け出してるみたいで楽しい」
子どものころ来たときは、高級ホテルか誰かの別荘かの二択だったから、別の場所に来たみたい！ とにこにこしている。

「月果はあっちの学校で、寮生だったんだっけ？」

「どっちもやったことある。寮も面白かったよ。学生のと時の話する？」

並んだ列が少しずつ動き出す。半分の空で「お好きにどうぞ」と返事をし、すぐに自分の軽率な相槌を後悔する。

「桔梗は、そのころから楓と付き合ってたの？」

そのころっていつよ、という確認は必要ないと判断し、簡潔に答える。

「付き合ってたわ」

「そのころからは？」

「……………」

どこをどう否定しよう、と思っていたら、のんびりと動いていた列が適切に進んで、

するりと自分たちの順番が来た。胸にロゴのついたジャンパーを羽織ったスタッフのお姉さんが、はきはきした口調で尋ねてくれる。

「何名様ですか？」

答えを待たれている質問は二つあるとわかっていたけれど、礼儀として、隣に立つ単刀直入な友人ではなく、目の前のはじめて会う人に先に返事をすることにして、人差し指と中指を立てた。

「二名です」

二名様ですね、と繰り返したお姉さんが、につこりと首を傾げる。

「エサはいかがですか？」

質問はこういう風に答えるのが簡単なものにしてほしい、と思いつきながらはつきりと答える。

「ありがとうございます。でも大丈夫です」

二人分の料金を現金で払い、さつさと大仰な門をくぐる。次のバスに乗れるかなあと、隣で神妙な顔をしている月果の先程の不躰な質問は、都合よく答えそびれることにした。

バスには、すぐに乗れた。

運転手さんに言われるままにつめて、バスの一番後ろの座席に座る。先ほどの会話の余韻が消えたところで、ようやく勝手にサファリパークの大事な部分をバツサリ切り捨てたことに思い当たった。

「あ、ごめん。そういえば、さっき、流れで勝手にエサ断っちゃったけどよかった？」
あれだけ楽しみにしていたのだ。今更ぶうぶう膨れるかなと思った月果は、意外にもあつさり首を振った。

「エサを持つてると、それをあげたくて、視界が半径五十cmになるからいらぬい」
「あ、そう……」

「あ、でも桔梗が欲しかったら、車内でも買えるよ？」
いいわ、と私も首を振った。

「生き物にエサをやつて喜ぶ趣味は特になぬいから」
そうだったけ？ と月果は髪を耳にかけた。

「千海はさ、桔梗に餌付けされたつて言つてたよ」
「生徒は別」

「ふうん、月果も桔梗の生徒になればよかつたな」

軽口を叩くモデルが大卒なことだけは知っているのだけれど、そういうえば、なんの専攻だったかは忘れてしまった。紫と変なインカレサークルに入っていたらしいことは覚えているのだけれど。だいたい私は、人の基本的な情報をさらつと忘れて、どうでもいいディテールばかり蓄えてしまう。

少しずつ人が入ってきて、車内はあつという間にいっぱいになる。

「意外と混むのね」

「そう？ 月果、もつと流行つてもいいと思う。これは面白い」

ぐるりと車内を見渡すと、一番多いのは、家族連れでもカップルでもなく、大学生のグループ旅行のようだ。たしかに、今週末は連休でもないのです、今晚観光地にいるのはできるだけ社会人を含まない面子なのかもしれない。

そう思うと、なんでこのメンバーでただの土日にならざるまで、という先日、人に呈された疑問が、自発的な問いとして、改めて色濃く夜の闇に立ち上ってくる。

だいたい、今回の珍道中のメンバーの一人である葉子さんは、早々に単独行動を宣言して、既にこの場にはいない。今日は葉子さんと同じ部屋に眠るのだ、と思つたら unnecessary 混乱が胸の奥に生まれそうになり、私は小さく、でも的確に頭を振って、現実の世界に対峙した。

「家族連ればかりかと思つたら、意外と大人が多いのね」

「だって子どもにはこわいもん、このツアー」

旅の言い出しっぺである月果は、当然のように言う。

「そうなの？」

「うん、けっこうこわい。月果、最初に来たときは同じくらいの子が泣いてたことしか覚えてない」

がたん、と車体が傾く音がして、きっかり定員通りの人数を乗せたナイトクルーズバスが動き始める。

「わーい！ 動いた」

マイカーでも回れるけど、みんなでバスでつてのがいいんだよねと、長い脚を窮屈そうにバスの座席の間に収納したパーツモデルは、その狭さがちつとも気にならないようにご機嫌な様子で長い腕で脚を抱えた。

出発進行だ！ と呟き、神妙な面持ちで窓の外を眺めている年下には、「月果は泣かなかったの？」と尋ねると、うっかり英語で話しかけられたときみたいに、つじつまの合わない顔になった年下の友人に首を傾げられる。

「へんなの、桔梗」

がたんごとんと車輪の振動がそのまま伝わってきて、私は少しよろけた。

「月果は泣かないよ。だって、勇敢なもの」

なぜだかわからないけれど、そのとき、私にはわかった。

最初に夜の動物園に遊びに来たとき、このすくすくと育ちすぎて、今は地球の裏側へもひとりで行けそうなブロンドが、きつとおそらく限りなく悲しいひとりぼっちだったのだということが。なぜだかわからないけれど、はつきりと。

がちやりとバスの前方で、重々しい門が開く音がする。

「面白いよ、すごく」

きゅつと、月果が私の服の裾を握った。

「桔梗も絶対気に入ると思う」

期待せずに見るわ、と私はできるだけそっけないトーンで答える。最後に歩いてライオンとホワイトタイガーの近くまで行けるオプシオンがあるから、絶対やろうね、と言って、月果はきゅつと生真面目な角度に唇を結んだ。

2. That Night

きっかけ

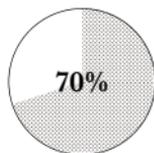


Kaede

X



Luna



「ただいまー」

玄関のドアが開く気配がする前に、騒々しい女の人が帰ってくるのはわかっていた。手の中にある小さな電子機器に、「今タクシー、もうすぐ帰る」と明確なお知らせが届いたからだ。

別にこれは、我々がお互いの状況を常に知らせ合う仲睦まじいカップルだからでも、粗雑なふるまいの似合う背の高い女の人が見た目とは裏腹に律儀だからでもなくて、単に必要に迫られた報告である。

そもそも、付き合っていないし。だいたい、ここ、私の家じゃないし。

ごろんと倒れ込んだソファは、ちよつとしたベッドくらいの広さがある。左を向くとセミダブルのベッドが二つ、右を向けば、内風呂へ続くドア。

「あれ、また温泉入ったの？」

そう、ここは今しがた帰ってきた同業他社の先輩・楓さんの部屋ですらない。

「それしかすることないですからね」

うまい話には裏がある、と言い古された格言を思い浮かべながら、私は宿の受付で

貸し出された浴衣の前を合わせた。

十十

「千海さー、今週末、ただで温泉行かない？」

そんな甘言に乗ったのが、そもその始まりだった。

聞かれたのが、平日に疲れて週末に焦がれた木曜日だったのがいけなかったんだと思う。松永楓という人は、頃合いを見計らうのが抜群にうまい。

「いいですけど、楓さんとですか？」

なんとか迷惑そうな台詞を選んで答えた私の声は、でも、苦労したほど不機嫌そうには聞こえなかった。タダで温泉。ただで温泉！ 不機嫌な声を出すには少し条件が良すぎる。

「そう、二人旅。うれしいでしょ？」

勝手に人の感想を代弁した楓さんに、宿はここなんだけど、と iPhone の画面で写真を見せられ、思わず瞬時に声が弾む。

「え、すごい！ 素敵！」

ここなら行きます、と特にこれ以上気が乗らないふりをする必要も感じず、即答すると、年上の女の人は画面をスクロールしながら苦笑した。

「予想に違わず現金な子ねー」

「ノリのいい子を探してたんですよね？」

私がいてよかったですね、とにつこりしてみせると、ほっぺたを軽く引つ張られる。じゃあ詳細はLINEで送るわ、というぞんざいな言葉を、先輩を立てる年下らしく、脳内で感謝の言葉に変換してあげることにする。ありがとう千海さん、これで一人できみしく温泉旅をしなくてすむわ、とかなんとか。

それにしても、タダで温泉。しかも内風呂付きの離れの宿。絡むとめんどくさい同業他社の先輩MRに、こちらからしつこく喧嘩を売る筋合いはまったくくない、おいしい話だった。

「でも、どうしたんですか、こんな宿」

まあちよつとね、という煮え切らない返事にぴんとくる。

「あ、振られたんだ」

「うるさいわね」

案の定、頭を叩かれる。怒ると雑に凶暴になるのが、松永楓という人のわかりやす

いところだ。

「うわあ、凶星ですか？」

「ごちゃごちゃ言うなら、半額取るわよ」

せっかく朝三十分早起きしてふんわり巻いた人の髪の毛を、ぐしゃぐしゃとためらなくかき混ぜた相手から、改めてこの旅の条件が提示される。

「黙つてもてなされるなら、全額タダの旅。ごちゃごちゃ言うなら……」

こわい顔をした女の人がみなまで言う前に、私は両手を顔の前であげてみせた。

「言いません、もう疑問はすべて忘れました」

「いい心がけね」

ぴろんと音がして、バッグの中の iPhone が鳴る。取り出してみると、交渉成立の証が楓さんから届いていた。温泉宿のサイトと、新幹線の時刻をキャプチャした画像。ものすごく手際がいい。

さて、とこれから弊社よりも先に夕陽先生とのアポがある楓さんは、ジャケットの襟を直しながら立ち上がった。

「この間、温泉行きたいって言ってたじゃない。むしろ私に感謝して？」

私は年下らしい舌つ足らずな口調で、にっこりしてみせる。

「心外ですけど、タダで温泉には行きたいのでいいことにします」

「千海はお小遣いだけ持ってくればいいの。それでも文句ある？」

「ないです。わーい、週末は人のお金で温泉かー。楽しみ！」

あ、一応、と旅行会社だったらクレームになりそうなタイミングで、特記事項が明かされる。

「交通費は出ないわよ」

もつとも、幸い今回のそれは聞き流せる範囲だった。それじゃあ最寄り駅で待ち合わせね、と言って院内に向かっていく背中を、あ、と思つて呼び止める。

「なに？」

食事は宿についてるからタダだけど、と振り返つた女の人に、共通の知り合いの名前を出して一応尋ねてみた。

「これ、葉子さんに断つたほうがいいですか？」

かつて楓さんとこの病院をめぐりライバル関係にあつた、現在の私の上司の名前に、ショートカットの女の人は、ダンスのようによくると大げさなモーションでターンした。

「いや、なんでよ」

「え？」

「プライベートの旅行まで、あんたは上司に報告するの？ 御社はそういうシステム？」

「……違いますけど」

「じゃ、問題ないわね」

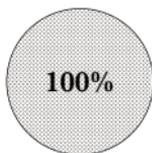
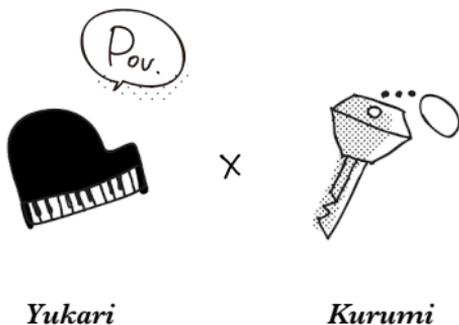
くつきりと微笑んで颯爽と歩き去る楓さんの背中を見送り、たしか海外に行くときは事前申請が必要なんだっけ、と入社のときにもらった社則の紙を思い出す。問題ないと思う、と改めて自分で自分に答え、一人残された病院の中庭で、もう一度先程届いた宿のサイトを眺めた。

わーい。週末は温泉だ。

楓さんがいるのは、まあ。相殺できる程度のデメリットだと思った。

4. Policy

分別と高慢



「ほんとうに、助かったわ」と、目の前に座る女の人がつこりほほ笑んだ。その手には、華奢なグラスが握られている。午後二時の日差しにきらきらと映える優雅な金色の泡は、彼女が準備を怠らない人間だというきらびやかな証だ。

予約したお客様限定のシャンパン。

人数分しらずしらずと運び込まれた華やかな食前酒は、うつとりするほどきれいな色をしている。

「人数を間違えても、前日だとキャンセルできないのね」

しように思えばできますけど、と私は相槌を打つ。

「キャンセル料は100%取られますからね」

それじゃあつまらないから、と目の前の薬剤師が、手首のブレスレットを鳴らしてグラスを持ち上げる。華奢なゴールドのチェーン。同じくらいの細さで、同じくゴールドに輝くバングルが重ねられている。

ぱっと見ただけではブランドものだとわからないシックさが、とても高塚くるみらしいチョイスだと思った。

「でも、私でよかったですか？」

いつもはつけない中指の指輪を回しながら、念のために、確認してみる。

「遠石さんが空いていて、助かったわ」

過不足のない社交辞令と均整の取れた笑顔が返ってきて、私は返事を省略し、そつと華奢なグラスを合わせた。

年の瀬の火曜日ということもあって、いつもは一見のお客様であふれているこのバーも、さすがに少し人が少ない。

「今日はお休みなんですか？」

見慣れた景色を見慣れぬ角度で見渡しながら、するすると肌触りが良すぎて、少し動くと簡単に肩を明らかにするストールを羽織り直し、私は当たり前障りのない質問を口にする。

「そう、たまには有給を消化しないとね」

激務だと噂に聞く大病院つきの薬剤師は、優雅な調子で頭を回した。

とはいえ、首元をゆったりと覆うぎっくりしたオフタートルのニットワンピースを着た女の人は、こうして見ると、ちっとも日々ハードワーキングに勤しんでいるよう

には見えない。

なんとというか、纏う空気がゆつたりとしているのだと思う。

こうして実際にいなかっただとしても、静かに音楽の流れるホテルの高層階のバーが、よく似合うテンポで生きているように見える。

三段になっているアフターヌーンティーセットとか、高い建物がぼこぼここと乱立して、いったい何を見ればいいのかわからない焦点のさだまらぬ東京の景色とか。

高塚くるみという人と、アップテンポという響きはどうしたつてうまく結びつかない。

かといって、センチメンタルでスローテンポなバラードには決してならないのが面白いところで、この人はいつもミドルテンポだ。速くもなく、遅くもない。

節制と節度という言葉を、私はいつも思い出す。

「突然声をかけてごめんなさい」

そう謝る声も、本心がわからないなめらかさだ。

「いいえ」

おだやかな人と話すときの癖で、いつもより気持ち弾んだ声を出して、私は次に口にする言葉に真実味を足してみる。

「うれしい」

よかつた、と伸ばした前髪を耳にかけながら、紅茶がよく似合う女の人は首を傾げた。

「アフターヌーンティーは好き？」

「嫌いな音大生がいると思います？」

正確にはもう大学生ではないけれど、と自分で自分の断定的な発言に内心つつこみを入れ、「それに、ここ、ちゃんとおいしいですよ」とにつこりしてみせる。

「私、食事がおいしくないとここでは、弾かないことにしてるので」

そう、と首を傾げたときにまたこぼれた前髪を、改めて左耳にしっかりとかける指先がすらりと長い。

お食事の準備を致します、といつもピアノを弾いているときにはかけられない声音で、見知ったウェイターに声をかけられ、私は胸の前で両手を合わせた。

「楽しみ」

「楽しんでくれたら、気が楽だわ」

あまり今の反応で改めてほっとしているようには聞こえない、先程までと同じく穏やかな声音で目の前の女の人が結論づけ、人のバイト先をぐるりと見回して声をひそ

める。

「この後、お仕事なんでしょう？」

ティントリップがしつかり乗った唇の両端をひゅつと大きく持ち上げて、私は社交辞令でしかない気遣いを、くつきりとした笑顔で振り払った。

「おかまいなく」

最初に温められたスコーンが、続いて三段のクラシッくなティースタンドが、流れるようにサーブされる。

「わあ、素敵」

何度見ても写真を撮りたくなる佇まいに、膝に置いたクラッチから iPhone を取り出すと、早くも二杯目の飲み物にアッサムティーを頼んだ女の人が、軽く口元を左手で隠した。

「なんですか？」

「ううん」

ううんじゃないでしょ、と思う。目元と口元が少しほころんでいるだけなのに、この五分ほどでいちばん素直に笑っているのがわかる。

こちらの怪訝な気持ちもダイレクトに伝わったらしく、いいえ、と少し上品な表現

で否定の言葉が繰り返された。

「そうやって、なんでも写真に撮るところは、大学生なんだなと思って」

いつもとつても落ち着いてるから、ついつい千海さんよりお姉さんだと思っちゃうんだけど、と何度も評された言葉で説明され、先程自分の頭のなかだけにとどめたつつこみを改めて口にして、肩をすくめてみせる。

「そうですよ。正確には院生だけだ」

そうだったわね、とほほえんだ薬剤師の声は、すでにこの人のスタンダードなトーンに戻っていて、さっきのままでもいいのに、と思う。

わからないけれど、このひとにはたぶん、葉子さんみたくになる素質がある。とらえどころのないエッチなお姉さん。まあ、葉子さんよりは、ずっとわかりやすく、しつかりした感じがするけれど。

どこがどうとは言えなかつたので、曖昧な感想ごとぐいつと残りの泡を飲み干し、ノースリーブの右手を挙げる。

「すみません、私も紅茶をお願いできますか？」

ダージリンで、と付け加えると、ウェイターからは会釈が、目の前の女の人からは、やわらかな笑顔が返ってきた。

「気が合わないわね」

うれしげと言つてもよさそうなその目元の角度に、私もにつきりする。

「そうですね」

自分の選択が正解だとわかつて。

誰かの気を引きたいときは、その人に同調しないことが大事だと教えてくれたのは、そういえば葉子さんだつたなと思ひ出す。

すぐにたつぷりとしたポットがもうひとつ運ばれてきて、熱い液体をこれまた熱々に温められたカップに注ぎ、まずはサンドイッチに手を伸ばした。

「おいしそう。いただきます」

いただきます、と遅れて手を合わせたくるみさんの指先は、当然のように綺麗に揃つている。私もやつていたからわかるけれど、たぶんこの人は、お茶をやつていたのだと思う。あるいは、日本舞踊。

葉子さんにあつてこの人にない隙は、たぶん、そこらへんの何かしらのせいなのかも。いちばん下の段に整然と並べられたサンドイッチをつまむ指先も、迷いがなくて綺麗だ。

5. Thanks, but no thanks.

ありがた迷惑

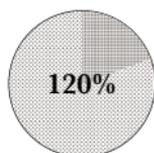


X



Kaede

Yoko



「すみません、この後一番早い便で、北海道に行きたいんですけど」

金曜日の朝八時。まったくもう、なんだってこんな時間に。こんなに急に。

世界で一番ツイてない、と120%純粹な我が身の不幸を嘆こうとしたら、羽田空港のカウンターに響いた決して上機嫌には聞こえない自分の声に、それよりもだいぶ本音を隠すのが上手いやわらかな声がふわりと重なった。

「ごめんなさい、次の新千歳行きの便、まだ空いてるかしら」

一瞬、不機嫌さを忘れて、隣のカウンターへ向き直る。

「あ？」

「あら」

会話は短い平仮名の応酬だけで済んだ。

「奇遇ね」

「奇遇ですね」

隣に立っていたのは、どう見てもビジネス用のジャケットを羽織った遊佐葉子だった。仕事に行く途中としか思えない同業他社の先輩に、私は首を傾げてみせた。

「迷うにはちよつと、会社から遠すぎるんじゃないんですか？」

少なくとも今朝の羽田空港には、私以外にも不運な女がいるみたいだ。

こほん、と目の前で控えめな咳払いがなされる。

視線を目の前のカウンターに戻すと、完璧なビジネススマイルを浮かべたグラウンド

スタッフが、ちょうど遊佐葉子と私の中間あたりにむかつて微笑んでいた。

「お席ですが、九時二十五分の便でよろしければ、二席ご用意できます」

「あ、えつと」

別に二席じゃなくてもいいのよね、という私の心からの注釈は口にする前に、「わあ、素敵」というのどかな遊佐葉子の声に先手を打たれる。

「ご友人同士ですか？」

「ええ、知り合いなの」

微妙に質問からずれた間違った答えは、即答することに意味があると知っている速さで、隣に立った同業他社がにつこりした。

心得たように、カウンターの向こうで制服を着たスタッフが頷く。

「それでしたら、こちらでまとめて承ります」

正しくはあるけれど、この場合、ちつともふさわしい答えになってはいないその返

答のせいで、偶然会っただけの同業他社の女は、長い付き合いの旅の同伴者に、するりとその立ち位置を変えた。

「あー、ほっとした」

人の気も知らず、朝でも夜でも同じくらいぼんやりしてみえるのんびりさで、長年よく知った年上の女がほほえむ。

「飛行機、乗れそうでよかったわね」

「……そうね」

上の空の相槌を打っている間に、かちやかちやとキーボードが叩かれ、有能なグラウンドスタッフによって、あつという間に席が二つ押さえられた。

「お待ちせ致しました」

音を立てて出力されたチケットが2枚、目の前に並べられる。

大きく首を傾げたい気持ちを抑え、無言で手を伸ばす。座席の数字は確認するまでもなかった。さすがに二大航空会社の内の一つ。ありがた迷惑なほどに、サービスが行き届いている。

ため息をつく暇もなく、ダメ押しのように告げられた。

「お席は並びでご利用しておりますので」

お預けになるお荷物はございますか？ と訊かれて首を振る。荷造りをする時間もなかったので、バッグはいつも使っているトートバッグだけだ。隣のんびり首を振っている女の人も同じように軽装で、これ以上、カウンターで第三者を交えて喋らねばならない案件がなくなってしまう。

案の定、それが売り物であるということが明確な角度で口角を上げ、優秀なグラブドスタッフが、手続きの終わりをきれいな言葉に変えてアナウンスした。

「それでは、よい旅を」

「ありがとうございます。とても助かったわ」

せめてもの抵抗で、最後の台詞は、隣に立っている年上の女より先に口にして、チケットをパンツスーツのヒップポケットに突っ込んだ。

+ Adult but Platonic. +

Saturday

-Wrong Answers-

無責任会社サタデー
saturday.m.company@gmail.com

文・星羅にな
絵・綺月るり

発行 2018年2月18日 初版発行

印刷・製本 サンライズパブリケーション株式会社様